この空の下、大地の上で

架音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この空の下、大地の上で

【Ｎコード】
Ｎ０７５２ＢＡ

【作者名】
架音

【あらすじ】
気が付いた時、そこはどことも知れない深い森の中だった。ごく普通のサラリーマンであったはずの東雲晶はその混乱の中、己が無力な少女に成り果て、あまつさえ呆然としていたところを巨大な狼に襲われそうになるという異常事態の中、晶は一人の剣士にその命を助けられる。
異世界から訪れた少女（中身は成人男性）と一人の剣士の出会いが何をもたらすのか、それは誰にもわからない。

プロローグ

思わず取り落としたビニール袋が軽い音を立て、晶は自分が――どれくらいの時間かはわからないが呆然としていたことにようやく気が付いた。

目の前に広がっているのは、見慣れたはずの自宅周辺の風景ではなかった。

そこにあったのは鬱蒼とした木々の連なりであり、鼻を刺激するのは濃密な樹木と土の香りであり、時折吹く風が木々の梢を揺らす音。

端的に言うならば、東西南北もわからない深い森の中。

が、彼が借りている賃貸アパートの周辺には記憶をたどってもこんな濃密な森林などなかったはずであるし、そもそも普通に道路を歩いていただけでこんな場所に普段着のまま迷い込むわけがない。

明らかに普通ではない異常な事態であり、そしてそれは周辺の環境ではなく晶の身体にももたらされていた。

「……、……！？」

呆然として、だからこそ何事かを呟こうとして無意識に唇を動かした晶は、今度は己の身体に起きている異変の一つに気が付いた。

――声が……出ない！？

思わずその両手で喉を抑え、それから今度はゆっくりととりあえず５０音を唱えてみようとやや腹に力を入れてから口を開く。

しかしやはり喉から声が出ることはなかった。

僅かばかりに出てくるのは、帯を震わせることのできなかった肺からの呼気が起こすささやかな風の音だけであり、何らかの意味を成す言葉も何の意味も持たない単なる叫びもついに形を成すことはなくそして……晶は己の身体に起こった異変が声だけでないことにようやく気が付いた。

――おれの手じゃ……ない？

最初に気が付いた箇所は声を出そうとし続け、思わず急き込んでしまい、涙を目元に浮かべつつ口元を押さえることになった自らの両手だった。

まるで丈のあっていないぶかぶかのダウンジャケットからちょこんと飛び出している色白で、華奢で、可愛らしい指先。

それは、いくらデスクワークが中心であまり身体を動かすのが得意ではないとはいえども成人した男性である晶の手では断じてない。

呆然としていた時間は、この森の中にいると気が付いた時よりも長かったのか短かったのか。

慌ててジャケットを脱いだ拍子に自分の頬をなでるのは、しばらく床屋に行く暇がなかったせいでやや長めになっていたとはいえ、腰まで届くほど長かったわけなどなく。

その自らの身体の異変に慄きながらも晶は半ば機械的に自分の身体を目で追い、小さくなった掌で触れながら確認していく。

明らかにだぶだぶになっているシャツとその上に着込んでいたスウェット。ゴムのおかげで腰の部分でかろうじて引っかかっているだけの同じくスウェットパンツ。締め付けが緩くなったせいで足首までずり落ちている靴下と明らかにサイズの合っていない靴。そし

て……

股間を押さえる掌には、あるべきはずのものの感触がない。

――女の……身体だって？

一周してようやく落ち着いたのか、あまりの事態に精神が摩耗したのか、晶は平板な調子で呟く。もっともそれが言葉になることはなかったわけであるが。

ガサリ

背後から何者かが下生えを踏みしめる音が響いた。

プロローグ（後書き）

初投稿になりますのでぼちぼち修正をしながら続けていく予定です。
当面の目標は週2回更新……できるといいなぁ。

?・森

どことも知れない森の中から、晶が聞いたこともない不吉な調子を伴った獣のような鳥のような叫びが一つ、響き渡る。
それが収まると再び、まるで何かを確かめるかのようにもう一度、今度は小枝が折れる音がやけに軽い調子で晶の耳朶を打った。

「……！！！？」

恐る恐る振り返った晶の前にあったのは巨大な――巨大な獣の姿だった。

それは恐らく……多分間違いなく狼なのだろう。少なくともイヌ科の生物であることは間違いない……と晶は思う。たとえその大きさが那須高原で見た牛よりも大きかったとしても。

無論そんな巨大な狼など晶は見たことなどない。

晶自身が見たことがある狼はＴＶの向こう側の映像であり、動物園の織の向こうにいるそれだけである。それでもこんな巨大な狼は晶の知る世界には存在していないし、記録があったとしてもそれこそジェヴォーダンの魔狼のような半ばおとぎ話のようなそれのようなものしかない。

あまりといえばあまりの事態に晶は目の前の巨大な生物を呆然と見上げ、獣の瞳を覗き込んでしまいそして、その場にへたり込んでしまった。

――自分はもう、この獣の餌になるしかない

獣の瞳から放たれていたのは人間のそれとはまったく次元を異にした、そしてそれ故にどこまでも純粋で強烈な殺意。目の前の獲物を襲い喰らい自らの血肉に変えるという限りなく透明な野生の決意。

何をどうやっても逃げることはかなわない。

どういった理由や理屈、はたまた偶然が作用したのかはわからないが、少女になってしまっている今では……おそらく男の姿のままでも。

低くなってしまった視線の先にいる獣は無力な農奴を戯れに嬲る貴族のような、むしろゆったりとした足取りで晶にその身を寄せてくる。

その口元からだらだらと涎を垂らしながら。僅かばかりに興奮しているのか生臭い息を漏らしながら。

――まさかこんな風に死ぬなんて思ってもいなかった……

晶は近づいてくる死神の体現のような巨大な狼をぼんやりと眺めながら、心の中で呟き、同時に祖父が亡くなった時の光景を思い出す。

最後の時は病院のベッドの上であったが、両親と自分と妹。それから近隣に住んでいた幾人かの兄弟と親戚に見守られながらの、大往生というのにふさわしい安らかな死であった。

――俺も爺ちゃんみたいな、いつかあんな風に死ねるといいなと思ってたのにな……

しかし今目前に迫っている死は、そんなとりとめのない夢想とは

正反対。見知らぬ森の中で、自分が自分であると示す身体はおおよそ信じられないそれになってしまい、見守るものもなく獣の餌となるような死。

知らないうちに両目からとめどなく涙があふれかえり、不意に股間が熱い液体でびしょびしょになる。

かすかに漂うアンモニア臭と、急速に広がる下半身の不快感に眉を顰め、こんな状況下で不快感を覚える自分の精神に思わず苦笑いを浮かべた時、どこかから小さな風を切る音が響いた。

?・森（後書き）

Ｒ１５指定するの忘れてた…

ジェヴォーダンの狼は１８世紀半ばにフランスに現れた狼？で詳しくはＷｉｋｉでといいたいところなんですが、あれに乗ってない解釈も書籍であったりするのでそこらへんは自己追跡してください。
一応ファンタジーなんで狼王ロボよりもこちらを引用してみました。

?・獣

それはほぼ同時に起こった。

右手前方から聞こえた小さな風切音に晶が耳をピクリと震わせ、弾かれたように狼が跳躍しようとして果たせず、その巨大な左後頭部に一本の矢が突き立つ。

直後、このどれだけの広さがあるのかも分からない森の隅々まで届くような、雷鳴のような咆哮がその咢から吐き出され空間を震わせる。その、あまりにも激しい怒りの色に染まった轟音に、晶は咄嗟には両耳を押さえきつく目を閉じて体を縮こまらせた。

直後ビシャビシャと音を立てて晶の小さな身体に降りかかってくる生暖かい液体は、狂乱の叫びをあげる狼の咢から吐き散らされる唾液か、それとも別の何かなのか。

――なんなんだよこれ！なんなんだよもう！

形を成さない叫びをあげ、固く目を閉じ耳を押さえ震える晶の傍らに何者かが走りこんでくるような音が響き、金属同士が打ち合わさるような奇妙に清涼な音が耳を押さえる両手をすり抜けて晶の耳朶を打つ。

そこからはもう、嵐のような振動と騒音の大合奏だった。

そして晶自身にその嵐に抗う術は一つもない。

ただその場に蹲り、今この状況に置かれている自身の不運。自分の事などまるで眼中にないかのように命のやり取りをしている獣とその相手。自分をこんな場所に導いた何か。

それらもろもろに対しての呪詛をその役に立たない唇から零し、その数倍の罵倒を脳内で晶は繰り返す。

――早く終われ！なんでもいいから早く終わってくれっ！……これが夢なら……！悪い夢なら……早く覚めてくれよ……！

そんな呪詛と祈りを繰り返し、きつく目を閉じ耳を塞ぎ蹲る晶に獣とその相手がどういった戦いを繰り広げているのかはわからない。かろうじてわかるのは、お互いのたった一つの命を掛け金とした戦いがその過程で引き起こす闘争の不協和音のみ。

悪魔のような狼の咆哮、固いものと柔らかいものをぶつかり合わせたような鈍い音、何かを引きちぎるかのような気味の悪い音、不吉な音色を奏でる獣や鳥の合唱。どちらの身体から迸ったものか生ぬるい……恐らく血液が晶の身体にも飛び散り、その気持ちの悪い感触にも晶は体を震わせる。

限界を超える緊張から晶の身体は再び自分の身体から排出された生暖かいもので汚され、その一つ一つが、晶の精神を少しづつ削り取っていく。その過程で再び晶は自分の下半身が生ぬるいもので汚れるのに気が付いたが、そのことに心を振り向ける……獣に餌と見定められ、絶望的な死を自覚したあの時にあった僅かばかりの余裕もなく。

それ故、晶は嵐が終わったことにしばらく気が付かなかった。

「……？」

恐る恐る手を放した耳が捉えたのは、風が揺らす葉擦れの音、遠くから聞こえてくるどことなく愛くるしさを感じる優しげな何らかの生き物の鳴き声。そんな優しげな音の中に混ざる場違いな激しい息遣い。

しかしその呼吸音も段々と落ち着いたものに変わり、最後に大きく息が吐き出されて静かになり……

「大丈夫だったか？」

晶の耳に届いたのはやや気遣わしげな、よく響く男の声でありそして晶にも意味の通じる言葉だった。

――……っ！？

晶は自分の耳を疑った。英語ですらろくに聞き取ることのできない晶にとって、意味の分かる言葉は日本語しかない。しかし……そんなことがあるのだろうか？あんな巨大な獣の姿を見てしまったというのに？

――……日本語……？でも、なんで？ここは日本？日本にあんな化け物がいる土地がある？けどでも……ええっ！？

あまりにも現実離れすぎる状況が続いた末に、届けられたありふれた言葉。それ故に晶は混乱し、それ故にそこにあるものを想像することができないまま男の声が聞こえてきた方に顔を向け……その凄惨な光景を視界に収めてしまう。

獣と男という二つの生き物が闘った結果が存在するその方向に。

４本あった足のうち2本を切り飛ばされ、倒れ伏している狼の腹は斜めに切り開かれ、黄色い脂肪のこびりついた赤く、黄色く、ピンク色の内臓がいまだに湯気を立てている鮮血のテーブルクロスの上に陳列されている。

今の自分の身体くらいの大きさの巨大な頭部の半分は抉られ、つ

ぶされており、灰色がったピンク色の脳が、眼窩から飛び出しているつややかな眼球とともに震えているのが見える。
呆然としたまま、晶は先刻まで自分を餌にしようとしていた獣をしばらく見つめ続け、……そしてその傍らにいた男にようやく気が付いた。

獣からほとばしったものだろう。その手には血にまみれた真っ赤な剣を握り、その半身を真っ赤に染め上げた男に。

命が助かったことで気が緩んだのか、鼻を突く生臭い血の匂いに酔ったのか、悪鬼もかくやという凄惨な男の姿に恐怖を覚えたのか。

それともそれらすべてが理由であったのか。

男がその血まみれでさえなければ恐らく魅力的に映るのだろう微笑みを浮かべるのを見たところで、まるで発条の切れたおもちゃのように晶はそのまま意識を手放した。

?・獣（後書き）

とりあえず晶君のトラウマになりそうな出来事はここで一旦終了。
今後もいろんなトラウマ事件は出てくる予定ですが。

かわいい主人公はいじめられて何ぼです……よね？

？・男

背後から迫る獣の息遣い。

その息遣いに追い立てられながら晶は深夜の住宅街を走り続ける。どうして追われているのか、何か自分の身に大変なことが起こりそれが原因で追いかけられている気がするのだがうまく思い出せない。

走っている途中で履いていたサンダルは脱げてしまい、靴下だけで冷たいアスファルトの道を走らなければならなくなったことにも晶は眉をひそめる。道路自体は舗装されているから走りにくいわけではないが、それでも時折小さな指先ほどの石のかけらを踏んでしまいそのたびに走る激痛が、疲労とともに晶から逃走するための気力を少しづつ奪って行ってしまう。

「誰か……っ！誰か助けっ……！！」

呼吸すら満足にできなくなりそうな状況下で、情けなくもまるで年端のいかない少女のような涙声でどれだけ繰り返したかわからない助けを求める叫びを再び上げるが、塀や垣根、フェンスの向こう側にある様々な建物から反応が返ってくることはやはりない。

――……っ！？

不意に何かに足を取られ、走った勢いのまま草むらに倒れこんでしまった。その時どこかにぶつけたのか、手足を覆う肌理細かな白い肌のそこここが血で滲み、あるいは青く、赤く腫れ上がってしまっている。

しかし今はそんなことを気にしている場合ではない。早く逃げなければ、もしも追いつかれたなら今度こそ喰われてしまう。

そう思い、腰まで届きそうな長い髪を垂らす頭を何度か振って砕けそうな気力を何とか振り絞って再び走り出そうとした瞬間……目の前にそれはあった。

自分の事を喰らおうとする巨大な狼の頭。一度死んだはずなのに晶の事をあきらめきれなかったのか、ピンクがかった灰色のつぶれた脳みそを震わせ、右の眼窩から垂れ下がった眼球に喜びの色を浮かべて、涎をだらだらとたらしながら、逃げることも忘れその場に腰を落としてしまった晶のもとへゆっくりと近づいてくる。

「……」

絶望の果てゆえにか、晶の喉はついに声を発する力すら奪われてしまったようだ。本人は気が付かないまま意味のある罵倒と意味のない呪詛を音のないまま、いっそ可憐といってよい口元から獣だったものにひたすら投げつけ続ける。

無論そんなもので獣の歩みが止まるわけではない。

ひどくゆっくりと晶のそばにやってきた狼は見せつけるように、恐怖をあおろうとするかのようにだらだらと涎とどす黒い血を流しながら、上顎の半分が崩された醜悪で巨大な咢を大きく広げ……いきなりその巨大な頭部がまるで風船のように粉砕される。

その唐突な展開に、吹き出す狼の気色悪い血流を避けることもできないまま呆然とその頭の向こうに視線を巡らせそして……

◇　◇　◇　◇

目を大きく見開いた晶は、自分の身体がうまく動かないことに気が付いた。が、別に何らかの手段で拘束されているわけではない。ただ悪夢の内容がひどすぎて全身がひどく緊張していたせいだろうと自分で無理やり納得する。

その証拠に全身は熱を持ち、実際に心臓はものすごい勢いで脈打っているというのに、体の奥底は不気味に冷え切っている感じで毛布をぎゅっと握っている自分の両手すら思うように動かすことができない。

――……毛布？

そんなものを抱えたまま外出する人間などいるのだろうか？少なくともコンビニに買い出しに行くためにそんなものを抱えていく人間はいないし、少なくとも自分は……

「気が付いたのか？」

手に握った毛布の裾を、眉を潜めて見つめていた晶の耳に、低くよく通る男の声が届いた。

慌ててそちらを見ると、こちらに背中を向けたまま……パチパチと何かがはぜる音がするということは焚火の前で何か作業をしているのだろうか？男は振り向きもしないまま言葉を続ける。

「“はぐれ”ならもう始末した。お前を囮にするような形になってしまったが……あそこから少し離れているがこの辺りはまだやつがねぐらにしていたあたりだから、一晩くらいはとりあえず安全だろう」

だから今日はこのまま野営をして、明日になったらここから3日ほどある――今回の討伐依頼をしてきた村に向かおうと、男は少女に告げる。

その言葉に晶は少しばかり眉を顰め、空を見上げた。木々のせいで太陽を直接見ることはできないが、まだ周りは明るいといって差し支えない。

――今から焚火を始めるとか、薪になるものがもったいない気がするんだけど……

そんな晶の疑問を雰囲気だけで察したのか男はクツクツと笑いを漏らし、やや呆れながら理由を告げる。

「日が落ちる速さは多分お前が思っているよりも早いぞ？そして一旦日が落ちたら人間は何もできない」

まあ、お前と同じ妖精種なら星明りだけでも動き回れるんだろうがな。

男はそう言うと傍らに積んであった枯れ木を一本火にくべる。

男の台詞に少女は困惑の表情を浮かべた。男の言葉から考えると、今の自分はただ小さい女の子になっただけではなく、人間とは別な種族……白人から見た黒人種や黄色人種のような存在に思われているらしい。

――けど、肌の色とかはそんなに変わらないような気がするんだよなぁ。眼の色はわからないけど……ひょっとしてこの黒い髪がいけないのか？

なんとなしに長く伸びた自分の髪の毛を一房つまみ、しげしげと眺めてみる。が、長さは確かに伸びたがそれは平均的日本人が生まれつきもっている色であり、それがどんなふうに問題になるのかは見当もつかない。

ひとしきり髪を弄り回していた晶は一つため息をつくと右手で髪をかきあげ……その途中で体の動作すべてを止めた。

ええっと？

髪をかきあげる途中で右手に触れたのは当然右耳……であるのだが、その感触がおかしい。

県大会準決勝がせいぜいだったが、小学校から高校まで続けていた柔道と多少かじった柔術。大学に入ってからやめてしまったが、その練習のせいで自分の耳はかなり変形していたはずだ。

――けど、これっ変形っていうレベルじゃねーぞ！？

具体的には大きくなっている。詳細的にも大きくなっている。それはもうコントのできるマジシャンのあれよりも大きく、しかも上下に伸びているというよりも左右に突き出す感じで大きくなっているのは遺憾の限りであります。

あまりの事態にバカなことを脳内で口走ったことを晶はプルプルと首を左右に振ることでごまかし、小さくため息をついた。

確かにこれでは目の前の男と同種の人間であるとは言いにくい。

――確か、亜人間とかいうんだったっけか？

大学時代のサブカルチャーにやたら詳しい……まあ、重度なオタクであった友人が時たま妙なことを織り交ぜつつ熱弁していた異世界やらファンタジーやらの定番種族らしいエルフとかドワーフとか？いうそれらの種族的特徴の一つに大きな耳……とかいうのがあったはずで、その扱いは作品ごとによっては人間の友人だったり敵対してたりひどい場合は貴重な奴隷としての……売買対象だったり……？

冷や汗が一つ、背筋に沿って流れるのを感じた。

――いやいやいやいやそう判断するのは早計だと思うし、仮にも命の恩人だよ？狼さんのブランチになる予定だった女の子を……命がけで助けてくれた人だよ？何の証拠もなしに恩人を不審者扱いするってのは男としてどーよ？

どちらかというと人間としてどうだろうかと言われそうではあるが。

女の子の部分で地味にダメージを受けつつ、晶は慌てて男の評価に上方修正を入れてみるがどうにも自己内男擁護チームは今一つ盛り上がらない。

何しろ少女の考えている懸念自体はある程度の妥当性は持っているからだ。

それであるが故に、そして直接的な生命の危機から脱出でき、余裕が持てるようになったおかげで逆に『この先に起こるかもしれない』出来事に思考を向ける余地が出来上がり……暗鬱な思考の海に知らないうちに飲み込まれそうになっていく。

それを留めたのは、鼻先に漂ってきたのはほんのり漂う甘い香りだった。

「ルパの実の搾り汁に蜂蜜を混ぜて温めたものだ。美味いぞ？」

男はそういいながら、呆けたような表情で自分を見つめる少女に向かって湯気を立てるクリーム色の飲み物の入った木製の器を差し出してくる。

けれどまあ、蜂蜜はもうないんでそれだけしか作れなかったんだが……ひょっとして苦手なものだったか？いやまあ確かにルパの実そのものは食えたものじゃないのは知ってるが、搾り汁は十分飲めるというか……あ～と、どこに行ってもこいつは子供なら喜んでくれたんだが……

段々と自信を失っていく男の言葉に晶は慌てて首を横に振ると、男の手から器を受け取り……言葉が出せないのでしばらく瞳を泳がせた後、深々と頭を下げる。

その仕草に男は何とも言えない複雑な……得心がいったような、憐れむようなそんな表情を少女が頭を下げた時に一瞬だけ浮かべ、何事もなかったように言葉をつづけた。

「そいつは冷めると格段に味が落ちるからな。早く飲んでみな」

男の言葉に少女はじっと手の中の器を覗き込み、恐る恐る口を近づけ一口すすり……いきなり頭をあげてびっくりした表情のまま男のことをじっと見つめてくる。

将来性満点な美貌の少女の猫のような、そして年相応に見える仕草に男は悪戯が成功したもの特有の笑顔を浮かべて見せた。

「美味いって言ったろ？さっさっと飲んじまいな」

晶は男に向かってコクコクと頷きを繰り返すと器を傾けて、その熱さに時々顔をしかめながらゆっくりと、しかし一度も器から口を外すことなく飲み干していく。

わずかながら感じる酸味とかすかなイチゴのような香りが、男の言うルパの実の搾り汁なのだろう。それと蜂蜜の甘さが合わさっただけのシンプルな味なのだが、極度の緊張にさらされ続けてきたせいか、それを限りなく美味に感じてしまう。

あるいは子供に……少女の姿になったせいで味覚も変化したのかもしれない。

――うう……餌付けされてるみたいで癪だけれど……

ともかく、美味な甘味のせいでさっきまで抱いていた男に対するネガティブなイメージは段々と霧散してしまっていっている。最初は何らかの薬品でも混ぜられているんじゃないかと警戒していたというのに、

警戒した方がいい。した方がいいんじゃないかなー。しなくちゃダメかな？……メンドクサー

くらいの勢いで警戒感がグングンと目減りしていくのを、自分の中にある冷静な部分は警報を鳴らしているのだがそれは全く役に立たないままで。

まあ、何があっても死ぬよりはましなんだし。

飲み終わる頃にはある意味究極の現実逃避的結論に落ち着いてしまい、自分でも気が付かないうちに緩みきってしまった表情のまま満足そうな吐息を一つ、漏らした。

「ところでだ、一つ確認しておきたいんだが」

なんだか無駄に愛嬌を振舞いまくっている少女を和やかに眺めていた男は、気を取り直して少女に尋ねた。

「お前、言葉が喋れないのか？」

?・男（後書き）

お正月？なにそれおいしいの？
な感じで年末年始を過ごしています。
結局三箇日休みなしなのは自分でもどうかと思いますが…

どうでもいいけどヒロインの相方（になる）はずなのに男としか呼ばれない彼の名前は多分次回明らかになるはずですきっと

?・名前

男の問いに、少女は一瞬狼狽したように視線を泳がせ、反射的に口を開こうとして……
それから諦めたような表情で小さく首肯した。

「そうか……それは生まれた時からか？」

フルフル

「つい最近になってからか？」

コクリ

「俺が……あの“はぐれ”と戦った後からか？」

……フルフル

「嘘がつけない性格のようだな」

４番目の質問の後の少女の仕草を見て、男は苦笑しつつそう言う。

一瞬思案するような表情になり、視線をそらせ、こっちをちらりと見た後頷こうとして、慌てて首を横に振る。

おそらく間違いなく少女は一瞬自分と“はぐれ”の戦いのせいで声を失ったということにして自分を庇護してくれることを求めようとして、途中でその行為に恥を感じて否定をした。そういうことなのだろう。

――ええ、その通りでございますよ～

晶は、まるでやんちゃをした孫を見るおじいちゃんのような表情を浮かべている男の事をじっとりとした視線で見据えながら心の中で毒づいた。

自分が思わずとってしまった行動。それをどういう風に男が解釈したのか、同じ男である晶には手に取るようにわかる。

わからなかった方が精神的には楽だったかもしれないが。

「まあいい。とりあえず今日のところは休むことにしよう。詳しい話……質問は明日移動しながらでもいいだろう」

もう完全に日が落ちてきているしな。

男の言葉に少女は小首をかしげて見せる。

確かに大分薄暗くはなってきているが、まだ寝るには少し早いんじゃないのか？何か行動をするのに支障はない程度には明るいはずなのに？

「さっきも言ったろう？人間は妖精種と違って訓練を積まないと夜目が聞かないんだ」

不思議そうな表情で自分を見つめる妖精種――明らかに古血統の特徴を体に持つ目の前の少女にはわからないのだろう。

まあ、それは仕方がない。世界から愛される妖精種でも、世界を見るには自分の目を使うしかない。そしてその目が映す世界は、ど

こまで行っても自分以外にはわからない。

「もう月が出てきている」

そう言って男は空に向けて指を指し、少女はその指先に従い空を見上げ、そこにあったものを見て何とも言えない曖昧な微笑みを浮かべた。

――確かにここは、俺の知らない世界だ……

そこにあったのは3つの月。

赤く輝く最も大きな下弦の半月、それよりもやや小さな蒼い満月。そして最も小さい白く柔らかな光を反射している上弦の三日月。

「特殊な訓練を積んだ……経験をつんだそういったやつらなら何とかなるんだろうけれどな。俺のようなしがない剣士は魔法の加護でも貰わん限り、火の傍を離れて何かをするのは無理だ」

少女の表情をどう受け止めたのか。

男はそれだけ言うと、少女に背中を向けて座りなおした。それからおもむろに、少女一人くらいならすっぽり入りそうな背嚢をあけ、何やらごそごそと探りながら言葉をつなげる。

「先の事はともかく、俺は“はぐれ”のことを頼まれた村に戻り、そこの長に報告しに行かなくちゃならん。とりあえずその村までは一緒に来てもらう」

来ないという選択はなしだ。お前、この森の中で一人で何とか生

きていくことなんかできないだろう？

男の言葉通り、晶にこの森で生きていく能力はかけらもない。特技柔道程度の普通のサラリーマンがサバイバル技術などもっているわけがない。

かといって、男の言葉に従うままでいいのだろうか？

多分、この男は自分に対してよからぬ考えを持っていない……と、思う。というか持っていたらいろんな意味でまずいというか、ロリコンだったら死ね。そうじゃなければごめんなさい。

月を見上げながら晶はそんな殺伐としたことをぼんやり考えてはいるが、この男についていく以外にどうすればいいのか見当もつかない。

自分にはあまりにも選択肢……というよりも情報がなさ過ぎる。

ここがどこかもわからず、社会制度や人口や宗教……それどころか最も根源的な、何が食べられて、何が食べられないのか。そんなことすらわからない。

どこか大きな町や村まで行けば余剰な食料だってあるだろうが、そもそも貨幣経済が成り立っていなければ、物資の購入だって容易ではない。

もっとも、無一文なのでそこら辺を気にしても仕方がないのだろうけれども。

それに、目の前の男と明確に違う生き物であるらしい自分の身体も……今後どうやって普通の人間と接すればいいのか。

言葉が話せないというコミュニケーション上のハンディがある上にこの状況はどんな罰ゲームかと、少女は項垂れて小さくため息をついた。

そんな少女の態度をどう思ったのか、何とも思っていないのか。目当てのものを取り出したのか、男は焚火の前で座りなおし、何やら手作業を開始する。

何かを切る音、釘を叩くような音が時々響き、その音の間に薪がはぜる音が静かに混ざる。

それがどれくらいの時間続いたのか。

「まあ、先の事はその時に考えればいい。とりあえず今日のところは寝ておけ」

その言葉の裏に何かがあるのかと晶は一瞬考え、そんなことを考えた自分に苦笑を浮かべると、男の言葉に従いその場で横になる、何はなくとも体力を回復しておくことは必要だ。

「ああ、これだけは寝る前に決めておいたほうがよかったな？」

男の問いに、横になった姿勢のまま少女は視線をその背中に向ける。

「いつまでもお前呼ばわりは不便で不自然だろう？せめて呼び名を決めときたいんだが？」

その言葉に晶は小さく頷いて見せる。その動作を気配だけで察し

た男は軽く肩をすくめて見せ、暫くの間聞きなれない単語をつぶやきああでもない、これはちょっと違うとぶつぶつつぶやき続けたあとで、少女の方を向いてひとつの名前を告げる

「安直だが＜夜の娘＞アーケィ＝ウィラーにあやかって……縮めて“アクィラ”というのはどうだ？」

――そう言われてもなー

いいか、と問われてもこの世界の神話やら物語やらを知らない晶には何とも応えようがない。せいぜい元の名前と発音が近くて助かるくらいの感想しかないのだが。

首肯して見せた少女に対して男はほっとしたように息を漏らした。

「名付けたなら俺の名も教えないといけないな……俺の事はドゥガと……呼べないんだったな」

まあいい。とりあえず覚えておいてくれ。

「それじゃあお休み、アクィラ」

――おやすみ、ドゥガ

ドゥガの言葉に晶は心の中で返事を返し、瞳を閉じる。

この世界に本来の姿と全く違う容姿を与えられ、自分というものを認識した直後、命の危険にさらされ、声はなくとも叫びを上げ、初めてこの世界の食べ物を口にし、保護された人間から名前を与えられる。

ある意味この瞬間、晶はこの世界で生きていくことを許されたのかもしれない。母の胎内から生まれ落ちたあとに体験する出来事を、まるで儀式をこなすかのように体験したことによって。

?・名前（後書き）

今回からサブタイトルつけることにしました。
主に自分用に

そしてようやく名前が出ました職業なぞのけんし
でも多分あんまり名前を使わない気がするのはまあ、晶が喋れないせいですね。
誰だこんな設定にしたやつ。

一応後々話の中で説明があると思いますが、一部解説

＞夜の娘＜アーケィ＝ウィラー

白い月に住む夜と休息と再生を象徴する神エリオン＝メシスの娘。
安寧と眠りを象徴し、その父の権能の一部を受け継いでいることから生と死も司ると言われている。
死に関しては安寧の中に含まれ、生は父の再生の中に含まれる。
外見は長い黒髪と黒い瞳をもった若い娘とされているが一部地域では妙齢の女性とも言われている。

一筆解説としてはこんな感じの神様です。作中で関わってくることは多分……ないといいなぁ

?・沈思（前書き）

修正が思いのほか早く終わったんで思わず投入。

ストックが尽きるまでは毎日更新……どこまで続くかな

1／8　段落がおかしいところと読みにくい部分を若干修正

?・沈思

――自分が服着てるかどうかくらい気が付けよ俺……

赤い月と蒼い月は姿を消し、白い月だけが梢に引っかかるように輝いている明け方近く。

目を覚まして半分寝ぼけながら身を起こした少女に向けて、夜通し不寝番をしていたらしいドゥガは少しだけ火の番を頼むと告げ、少女がぼんやりしつつもしっかり頷くのを確認してから横になった。

そんな男をしばらく眺めていた晶は一つ大きな背伸びをし、立ち上がろうとして毛布を跳ね除け、その途端露わになった何も身に着けていない自分の姿に気が付いて数十秒。

晶は慌てて跳ね除けた毛布を体に巻きつけ、あまりにも幼い自分の身体に何らかの衝動を感じない正常な性癖であることをなんだかわからないうちに神に感謝し、そしてため息をついた。

――そりゃまああれだけ血まみれだったはずなのに、血の臭いしなかったよな……

ともかくあらためて冷静になってみると、十歳くらいの少女の姿の自分というのは……なんと言っていいのか、色々と難しい。

思い返してみれば昨日はほとんど動転しっぱなしで、自分の身体の変化に驚いたのはほんの少しの間だった。

――何しろ驚いた直後であれ……だったもんなぁ……

普通に考えれば十分以上に非常識な出来事ではあるのだが、何し

ろその直後に発生したのは紛れもなく命の危機だった。冗談っぽく頭の中で呟いてみたがドゥガの介入がなければ、自分はこのどことも知れない森の中で命を奪われ、あの獣の餌になっていたはずだ。

そうなった時の自分の姿を思い浮かべて、晶は小さく背中を震わせる。

ともあれそんな生命の危機から救われた直後だったせいなのだろう。今考えても意識を取り戻し、男と会話をして再び眠りにつくまでの間の自分はものすごく自分らしくなかったような気がする。一応何を聞かされ、どんな反応をして何を考えていたのかは一通り覚えている。が、それらの一つ一つが妙にふわふわした感じで、どうにも現実感が足りない。

――あ～……小学生のころの作文とかみつけて思わず読んじゃった時の気分だなこれ……

自分の部屋だったならじたばたしながらその辺をごろごろ転がっていたことだろう。モノが多いせいで実際にそんなことをしたら多分、埋まる。色々なものに。

そんなことはともかく。

いつまでもそんな風に自分の気持ちを持て余し続けるのもいいことではない。それはそれとして、割り切れないが割り切るか後回しにすることに決め、男が横になる前に着替えだと告げて傍らに置いたものを手に取った。

一つはいわゆる貫頭衣。弥生時代あたりの稲作とか高床式倉庫とかで描かれる農民ＡＢＣといった人物のイラストなんかでよく見る

あれである。
一枚の大きめの布の真ん中に頭を通せる穴をあけ（襟の部分は当て布がしてあった）両脇を縫い糸で止め、ボタンホールのような布に開けられた四つの穴を通された革紐は多分ベルト代わりのものだろう。
手触りは麻よりも滑らかではあるけれども綿ほど肌触りはよくない。
布の価値はよくわからないが、長さ二メートル幅六〇センチくらいの少しくすんだ白い布というのはどれほどの値段がするのだろうか？

自分のために使ってくれたということは、それほど高くないのだと思いたいところではあるのだが。

もう一つは革製のサンダル。
多分三枚か四枚の革を重ねて靴底を作り、指先が出ないようにつま先は加工され、足首で固定できるようにか太めの革紐と細めの革紐をつないだような少し長めのそれが踵の部分に取り付けられている、

――意外と……というかめっさ器用ですね……

古着を買う趣味もなく、何着かのスーツ以外の普段着は量販店のものを、着られなくなるまで着倒し、古くなったら捨てて買換えという現代日本人らしい生活をしていた晶に裁縫技術はほぼ皆無なので、多少不恰好でも服と履物を作れるというのはちょっとした驚きでもあった。

しかし驚いてばかりもいられない。

晶は毛布を足元に落として立ち上がり、スウェットを切るような感じで頭を通し、腰の革紐を締めてへその前あたりで結ぶ。
上から見ただけではよくわからなかったが、自分の胸はささやかながら膨らみを持っているらしく、男のころとは全く違うくすぐったさを晶は覚えたがとりあえず無視することに決めた。特にその一番敏感な部分は、気にしたら多分負けてしまうので。

サンダルの方は、むしろ何でこんな技術を持っているのかと思うくらいにぴったりだった。
踵の紐の根元部分を足首に二回巻き付け、その上をもう一度回す感じで細い紐を巻き付け脛の方で紐を結ぶ。少し歩いた感じでは特に違和感を感じないくらいによく自分の足にフィットしていて逆にちょっと引いてしまった事に関しては、ドゥガに対して秘密にしておこうと晶は思った。

――で、これからどうするかだよなぁ……

焚火が種火くらいの大きさになっているのに気が付いた晶は慌ててドゥガに頼まれた仕事を思い出し、何本か小さめの枯枝をくべて火の勢いを大きくしてから太めの薪を3本ほどくべてから傍らに腰を下ろす。

――寝て起きたら全部夢でした……ならよかったのに

そう思ったが、新しい服と履物を身に着けたのにそんなことは毛布にくるまってる時に考えるべきだよなーと、思わず笑ってしまう。
目の前の焚火にかざすてのひらは、すべすべでぷにぷにで自分のものとはとても思えないのに自分の思った通りに動き、心地よい熱気を自分に伝えてくる。

子供……それも女の子になってしまい、その上目の前でまるで死んでいるかのように静かに微かな寝息を立てている男の言葉によれば、自分は“妖精種”という人間とは違った知的生命体らしい。

とりあえず三光年くらい譲ってそれ自体はまあいい。本当はよくないのだがいいことにしておく。妥協の範囲内と自分をごまかしておく。

現状一番の問題は声が出せないというその一点だった。

どういった原理か理屈か法則かは晶には全く見当がつかないが、とりあえず言葉はわかる。少なくともドゥガが所属している国とか民族とか、そこら辺の会話を聞き取るのは可能だろう。

だから当面のところはドゥガに引っ付いていけば生きていくことは可能になる……と思う。とりあえずすぐに生命の危機がどうこうとはならない……はず。

――見た目ごついけどお人よしっぽいしなー

ひょっとしたら自分がこのまま大きくなったらいろいろと倫理的にあれな状況とか、おいでませ大人の世界へといったこともなきにしもあらずだが、その頃には色々覚悟が決まってるかもしれないし、決まってなければ、まあその時考えよう……脱線しすぎだ。

考えても仕方がないはるかな先の事はとりあえず棚上げにして、ドゥガと引っ付いていかなかった場合を考えてみよう。

――まず、森から出られなくて死ぬかなー

考えるまでもなく死亡フラグである。しかもおそらく最大最短の。

では森から出た後に別れたらどうなるのかと考えれば、やっぱりこっちもろくでもない未来しか思い浮かばない。

声が出せないということは、最低限の意志を他人に伝えることすらはなはだ困難ということだ。

たとえば治安がそれなりにいい街にいたとしよう。それでも犯罪は起こるだろう。現代日本だって痴漢から強盗、殺人まで軽重はあれ毎日どこかで犯罪が発生している。

仮に自分がそれらに偶然巻き込まれても、自分は助けを求める悲鳴を上げることすらできないのだ。

と、なるならばドゥガから離れて行動するという選択肢は取れない。少なくとも自分の身体を自分で守れるくらいに強くなれないうちは絶対に。

――厳しいってもんじゃないなー

ほとんど詰んでいるような状況ではあるが、晶は当面の大雑把な計画というか方針……のようなものを立ててみる。

とりあえず文字を書けるようになること。最低限の文字を覚えて筆談できるようになるだけで選択肢はかなり広がる。問題があるとすれば選択肢の幅が識字率の高低で極端に変化するといったところか。

……識字率高いといいなぁ……

七割とか贅沢は言わないからせめて四割は維持していてほしい。三割以下だと覚えるだけ無駄になりそうな感じだし。文字を書けるようになりました。読める人はいませんでしたでは笑い話にもならない。

晶は首を軽く振り、とりあえずネガティブ方向に行きがちな自分の考えをいったん強制的にリセットする。

あとは、ドゥガも含めて人の話はよく聞くこと。自分には常識レベルの段階から情報がないし、自分が教えて欲しいものを他人に伝える術はほぼない。

特に常識レベルの情報はこっちが意図してなんとか教えてもらおうとしても、気が付いてさえもらえない可能性は高い。なにしろ常識……子供でも知っているのが当然の事なのだから……よく見て、よく聞く以外に取集方法はないくらいに思っていた方がいいだろう。

そしてあとは、ドゥガに引っ付き続けるために早急に何らかの有用な技能を身に着けるべき……なのだろう。

――裁縫と料理くらいかなー……できることは

捨てられないように頑張らないと。捨てられたら死ぬしな多分。

そこまで方針を立てたうえで、晶は改めて考える。

――日本には帰れるのかなぁ……

来られたのならば帰れるはずと、軽々しく考えることはできない。

友人のオタクから借りた何冊かの本にあったように、『何者かに召喚された』という事態ならばまだ帰還する方法について検討することができる。
呼び出す技術があるならば送り返す技術もあると考えられるし、なければ作るという試行錯誤もできる。ひょっとしたら魔王を倒せば自動的に送り返してくれるのかもしれない。

しかし自分のように……気が付いたらここにいたという場合は、どうすればいいのか？

それがどれだけ非常識なものであれ、自分が巻き込まれた事態がまっさらな自然現象のようなものだった場合……何をどうやって元の世界に帰ればいいのか、見当もつかない。

――……っ

一筋流れた涙を慌てて晶はぬぐい、晶は口元をきつく結び、目の前の炎を凝視する。

泣くのはまだ早い。

泣くのは本当に絶望した、その時が訪れてからでいい。

晶が改めて強くそう思った時、男が軽く身体を震わせて起き上がる。

いつの間にか白い月は完全に森の向こうに消え去り、太陽が木々の間から姿を現していた。

そんな朝日に包まれる森の中で晶は一つため息をつくと首を振り、

忘れていた懸念事項に対して思考を巡らせた。

――パンツが欲しいって言うのはどうやって伝えればいいんだろう？

外気が直接当たるという非常に落ち着かない腰回りの感触に閉口しながら。

まさか下着自体が存在しないってことは……ないよな？

?・沈思（後書き）

オチがのーぱんとか……疲れてるのかなスカリー

晶君独白と現状把握に努めるお話でした。
女の子になっちゃったのに驚ききる直後にあれですから。インパクトとしては肉体変化より命の危機ですので、晶君内部問題としてびっくり度が落ちてしまっているのは否めない今日この頃。
もうちょっといろいろ葛藤する前に覚悟決めさせられちゃった感じでしょーか

そして意外と器用ななぞのけんし
でも普通に一人旅とかしてるとそういうスキル上がりそうですよね？

しかし一向に先に進みませぬね……野営地から離れるのは次の次くらいになりそうです。多分

?・毒草

「……さすがは“妖精種”といったところか」

ドゥガはそう言うと、やや呆れたような……それ以上に厳しい光をその双眸に宿し、男に言われるまま目の前の野草の選別をしている少女を見つめていた。

◇　◇　◇　◇

きっかけは、朝の食事用にと採取してきた何種類かの野草だった。焚火にかけた鍋の前でドゥガの手で選り分けられるその野草の中にあった一本の、他のものとそっくりなそれを見た瞬間、晶の身体が硬直した。

あれを食べたら死ぬ。

脈絡もなくそう思った晶は反射的にドゥガの腕をつかみ、片方の手でその野草を指差した。見ているだけでも気持ち悪くて顔を逸らしながら。

そんな少女の行動に訝しげな表情を浮かべ、指差されたその野草を手に取りしげしげと見つめそして、苦々しくドゥガは呟いた。

「……馬鹿か俺は……」

何度か自分の事を罵倒する言葉を小さく呟いた後、男はふと少女の事を見つめ、頭を下げた。

「俺の不注意だった……まさかこんなところに生えているとは思わなかった……知っての通りこいつはもっと寒い地域にしか生えないはずで……」

いや……これは言い訳だな……

男はそう呟くと、少女に向かって頭を下げる。気が付かないままあれを鍋の中に入れていたら……“はぐれ”を討伐したのに毒草で行き倒れなど笑い話以外の何物でもない。

「ともかく助かった。あれを食べていたら完全にまずいことになっていた」

そう言って頭を下げる男に少女は慌てて両手を振り、ぶんぶんと頭を横に振る。何しろ先に助けられたのは自分の方だし、あれが毒のある草かどうかも判らないまま男にしがみついてしまったには完全に偶然の結果だ。

臭いか何かわからないが、とにかく気持ち悪くて反射的に行動してしまった結果、男に注意を促し男がその知識で毒であると判断したのだから。

「謙遜することはない。小さくてもさすがに妖精種だな。あれは特に見分けにくい種類の毒草だったんだが……」

称賛する男の言葉に焦ったように、少女は更に首を横に振る。

あれが毒であるとか、本来別の世界の住人である晶にそんな知識はもちろんない。

気持ち悪い。

ただそれだけの自分の直感というか、反射的な感情の発露でやったことであって、持ってもいない技能を持っていると誤解されるのは今後の事も考えればいろいろ問題がある。

そんな少女の必死なしぐさから何かを感じ取ったのだろう。男は僅かばかりに眉を顰めてから口を開いた。

「……ひょっとしてだが……あれが、毒草だとは知らなかった？」

男の言葉に少女は勢いよく何度も頭を縦に振る。

「なら、どうしてあれが危険なものだと分かった？」

その問いに、晶は自分でもちょっとこれはないよなーと思いつつ、可愛らしくコテンと小首を傾げる。言葉が使えない分どうしても判りやすい態度を示さなければならないとはいえ……深く考えるとなんだか無性にジタバタ暴れたくなるので考えないようにする。

そんな晶の乙女心……ではないが微妙な葛藤を無視するか気が付かないままドゥガは少女の態度に考えを巡らせ、そして真剣な表情を顔に張り付かせたまま立ち上がる。

「……確認させてもらいたいことがある。少し待っていてくれ」

自分が思ったよりもはるかに真剣そうな表情でそう告げる男に若干引きつつも、少女は小さく頭を縦に振る。それを確認すると男はおもむろに立ち上がり……しばらくして戻ってきたその腕の中には

様々な野草、果実、キノコが抱えられていた。

「こいつを食べられるものと、食べたら死ぬもの、そのどちらでもないものに分けてみてくれ」

目の前に積まれた雑多なそれらを眺め、それから男の顔を見た少女はその言葉にやや呆れたような、戸惑うような表情を見せる。が、男はとにかく勘でいいからと告げ、改めて少女に頭を下げる。

そんな男に押し切られるような形ではあったが、困惑した表情を浮かべつつも少女は一つ頷いて野草に視線を落とし、それから選り分ける作業を開始した。

これは気持ち悪い。

そう思ったものは手を触れるのも嫌だったので、そこから抜き取るような感じで食べられそうな何種類かのキノコ、食べても死なないけれども何かありそうな野草とキノコを選り分けて見せてから男の事を見上げ、これでいいのかと確認を取るように小首をかしげて見せる。

「……さすがは“妖精種”といったところか」

さっきと同じような、それでいて全く違う意味を込めた言葉を少女に聞こえないように、男は小さく洩らす。

少女の手つきは完全に素人のそれで、見分けるべき点を気にしている様子も……そういった判別方法があること、それに気が付いてすらいない。実に無造作に、それなのに目の前に積まれた植物の山から、男が言った通りに毒物を選り分けている。

“妖精種”は毒を見抜く……か

内心苦々しく思いながら、人間の間で伝わるその迷信をドゥガは少女の手つきを見ながら心の中で呟いた。

それは遥かな神話の時代、自然と“闘う”道を選んだ人間とは違い、自然と“共に在る”道を選んだ妖精種に対するやっかみから出た言葉か、それとも人間の知らない薬草を数多く知るその知識の多さから生まれたのか。もしくは人間の五倍とも十倍ともいわれるその長命さに理由を与えたかったからか。

が、たとえその言葉が一旦としてその事実を備えていたとしても、それは『経験』や『知識』に裏打ちされた『技能』でしかない。

事実数少なくはあるが、付き合いのある妖精種の友人は薬草毒草に対する深い知識とそれを取り扱う巧みな技術でもって、毒を見抜いている。

しかし今、無造作に作業を終えた少女がやり遂げたことは……

注意しないといけないな……

自分の知る限り、完全に毒物を種類分けした少女を一瞥し、ドゥガは頭を振り、自分に向けて自戒の言葉を漏らした。

この少女は毒物とそうでないもの、毒物の中でも致命的なもの、麻痺毒や睡眠毒のようなものを見分けることができる。恐らくただ直感のみで。

そんな御伽噺にしか存在しない能力は、現実に置いてはいつだっ

て破滅と悲劇をもたらす呼び子にしかならない。
自分でも気を付けていなければ少女を道具のように扱ってしまうかもしれない。

「とりあえずアクィラ。今みたいな毒物の選別は俺が見ている前だけにしてくれ」

男の言葉に、その真剣な表情になぜか少女は両膝をたたみ、踵の上に尻を乗せるというあまり見ない座り方で姿勢を正し、男に真剣な表情を返した。

「妖精種の毒物判定能力に関して、人間の間には迷信じみた話が伝わっている」

少女の座り方に僅かに訝しげな表情を見せ、古血統に伝わる風習みたいなものかと思い直し、ドゥガは言葉を続ける。

「……曰く、妖精種は毒を見抜き、毒を操る。薬草へ人を導き果実へ獣を誘う。見抜いた毒が人の手によるものならば相応の呪いを返し、その手で煎じた薬草は死者の目すら再び開ける……完全に御伽噺だが、年寄りなどはいまだ信じているものが多いし、そうでなくとも話くらいは聞いたことがあるというものは数多くいる」

実際のところ、俺の友人の妖精種はそんな話を笑い飛ばした。御伽噺だと。自分たちが毒を知るのは人より長い寿命のおかげで、人よりもそれを覚えるのに時間をかけられるからであると。

「しかしアクィラ。今の仕業は御伽噺のそれ、そのものだ」

その言葉に少女は一瞬目を見開き、男の表情を伺うと今度ははっ

きりと顔色を変え、困惑の表情を浮かべたまま再び男にしっかりと視線を合わせる。

その表情に何を感じたのか。

ドゥガは一つ頷いてみせる。

「とりあえずわかる範囲の毒物の見分け方は俺が教える。それで足りない部分は俺の知人を紹介してやるからそこで学ぶんだ。それまでは……勘で毒物の判定ができることを知られない方がいい」

神妙な表情でしっかりと頷く少女を見て、ドゥガは一つ息を吐き頭を振り、それからもう一度少女の事を見つめた。

「まずはその、反射的に毒物を避けるのを我慢する訓練から始めるか」

男の言葉に心底いやそうな表情を浮かべる少女を見て、ドゥガは僅かばかり苦笑をしつつ心の中で呟いた。

意外と長い付き合いになりそう……か？

?・毒草（後書き）

晶君改めアクィラのちーと能力が一つ解除されましたが、めっさびみょー

ちなみに人に見つかったらよくて首輪を付けられて権力者の生きる毒物判定生物として一生を終えるか、悪ければ実験材料ののち死んだら加工されて万能の解毒薬として売られてしまうような、そんな危険な能力です。
主に彼女の身の安全と平穏な生活的に考えて。

ちなみに暗闇視力は種族特性の一つなのでそんなに珍しい能力ではありませんというか人間以外の種族の基本能力です。
つまり人間が不器用なだけ？

なぞのけんしは妙なフラグを順調に立てている模様。

そしてついに次の更新で野営地を離れることに。

まあ、相変わらず森の中ですが。

?・距離

刃渡り五〇センチはありそうな、それだけでも十分武器になりそうな片刃の斧で、多くはないとはいえそれなりに繁茂している丈の高い下生えを刈り取りながら進むドゥガの事を微妙に視界から外しつつ、晶は一つため息をついた。

――なんというか、あれはなぁ……

晶の言うあれとは、まあいわゆる食べて飲んだ結果生ずる生理現象に関してだった。

この姿になってしまってからの二回は、やってしまった結果に対する羞恥は感じるが、行為そのものは明確に意識できるだけの状況下になかったこともあって、欲求を覚えるまでは別段意識せずにいられた……というよりも逃避していた。

が、出発直前に感じた欲求はそれら逃避し、気が付かないようにしていた物事を強引に晶に突き付けてくるわけで。

それをしている最中に感じた喪失感と、開放感。汚れた股間を綺麗にしておけと置いていった器に入った水を見た瞬間の今まで感じたことがないくらいの羞恥と、それを使って言われた通りに股間を洗浄した時のやるせなさ。

仕方ないことだと頭では理解しているのだが……気持ちは理性のみで何とかできるものではない。

――ああもうやめやめっ！

少女は立ち止まるとかつて柔道の試合直前によくやっていたように、ペチペチと自分の頬を叩いて強引に気持ちを奮い立たせた。

どっちにしろこの身体でいる限り、ずっと付きまとう問題だ。割り切れなくとも慣れていくしかない。

アクィラは瞳を上げ、自分が歩き出すのを待ってくれていたドゥガの所へ、とりあえず自分が気持ちを切り替えたことを示そうと、あえてゆっくりと歩を進める。

そんな少女に対して男は何も言わないまま、そばまで来た時にポンポンと二回ほどその武骨な手で軽く少女の頭を叩き、再び藪やら低木やらを排除しつつ前進する作業を再開すた。

――しかしこれは……すごいもんだなぁ……

軽くため息をつきながら晶は目の前の男をしげしげと見つめなおした。

改めて男の後ろ姿を見てみると、その力強さに晶は男として羨望と嫉妬を感じずにはいられない。

なんというか、かつていた日常から考えても、目の前で斧を振るう男の能力は規格外もいいところだった。

おそらく……五〇キロ以上はある背嚢を背負い、胸と腹、太腿と腕に一部金属で補強した何枚も張り重ねた厚みのある革製の鎧をまとっている。さらに、ぶっちゃけると金属の塊である剣を腰に吊るし、左腕には直径六〇センチはある木と革を重ね、金属板で補強した円形の盾を装備し、腰に下げる剣よりも重そうに見える斧を振い、

道なき森の中に道を切り開いていく職業謎の剣士。

――この世界の人間はみんなこんな感じなのか？

なにしろ晶の知っているここの人間はドゥガのみである。あの男がこの世界での平均なのか、飛びぬけてすごいのか。考えたくもないがあれで最低レベルという可能性も捨てきれない。

晶自身確かにそれなりに鍛えてはいたし、普通の成人男子よりはよほど体力等に自信はあったのだが、こんな足場に悪いところで重量物を背負い、動作を制限する防具を身に着けたまま、斧を振るい続けるような馬鹿げた体力は持っていない。
恐らく三〇分もしたら完全に息が上がってしまっているのではないか？そんな作業を延々と二時間くらい続けている上、まだまだ余裕がありそうなドゥガの様子はなんというか、言葉も出ない。

「疲れたか？」

思わず再び足を止めてしまったのに気が付いたドゥガは斧を振るう手を止め、アクィラの方を見やる。と、少女は慌てて首を振りそして、照れ隠しなのか、少女はそっちこそどうなんだと、問いかけるように視線を向ける。
そんな微笑ましい少女の行動に、男は軽く肩をすくめて見せた。

「俺はまだ余裕はあるんでな。ま、腹も減ってきてることだし、後しばらくしたらトリアス川に出るからそこを渡った後に休憩にしよう」

――何で聞きたいことが分かったんだ？

「……お前は気持ちがすぐ表情に出るからな。半日も見ていれば俺でなくとも大体わかるようになる」

男の返答に晶は不満そうに口をとがらせ、その表情にドゥガは笑いを漏らし、伐採と前進の作業を再開する。

――まあ、表情を読んでくれるのならコミュニケーションは格段にとりやすくなる……なるけれども。

何となく納得がいかないというか、具体的には悔しい。

朝の毒物判定の一件から、さらに男が自分に対して過保護度を上げたような、そんな気がしてならない。

確かに今の自分は見たとおりの小さな少女な上、出会ってからの行動の一つ一つが果てしなく胡散臭い。そんなわけありの少女をエスコートする態度としては、男のそれはわからないものではない。そのことは頭では理解できるのだが……

気分的にはあまりいいものではない。

男の自分に対する態度に関してというより、自分と男の差を考えてしまうと何とも居心地が悪い気分になる。

果たして自分が同じような状況に巻き込まれたとき、男のような態度を維持できるのかどうか？

そんな男としての器の差を現在進行形で当事者として体験しているようなもので、しかも自分がドゥガほどの包容力を持っていないということも、わかりたくないがわかってしまう状況はなんというか、へこむ。

――に、してもここが俺の知らない世界っていう雰囲気が全然しないなー

また思考のダウンスパイラルに入り込みそうになった晶は頭を振り、視線を自分の周りに巡らせた。

昨夜は三つの月を見て、ここが自分の知らない世界であることを見せつけられた晶であったが、延々と続く代わり映えのないごく普通の森の木々の様子は、ここが異世界なのだという実感をどこまでも薄く引き伸ばしてしまう。

――視界にはどこまで行っても木、木、木……か。あ、鳥？

晶に植物というか樹木に関する知識があればまた違った感想になるのだろうが、当然そんな知識はなく、したがって感想としては少々藪の多い雑木林を延々と歩いている。それ以上の感慨を持ちようがない。

「この時期は森の中も比較的安定しているからな……トリードの活動期とも少し外れているし」

ばっさばっさと豪快に斧を振るい、切り倒した蔦やら低木やらを踏み砕きながら男が再び声をかけてくる。

――……こっちも見ないで心を読むなよおっさん……トリードってなんだ？

男のあり得ないくらいの雰囲気を読む能力に呆れつつ、晶がなんだか生温い視線を向けるのと、いきなりドゥガが大きく後ろ……アクィラの方に向かって勢いよく左足を踏み出したのはほぼ同時だっ

た。
直後晶の頭上の梢ががさりと一度音を立て、事態についていけず硬直した晶の頭と梢の間の空間を、盾を垂直に立てたドゥガの左腕が通過し、同時にぐちゃっという柔らかい物を叩き潰したような音が晶の耳に届く。

はっとして晶が男を見上げたが、ドゥガはちらりと一瞥しただけで無言のまま視線を晶の右手方向、自分が殴り飛ばしたそれに向け、ゆっくりと歩きだす。。

その男の進む先に恐る恐る視線を向けた晶が見たものは、なんだかうねうねとのたくり動いている長さ一・五メートル太さ五センチくらいの……端的に纏めると緑色をした巨大ミミズとしか言いようのない、どこか生理的嫌悪感をもたらす奇妙な生き物だった。口にあたる部分は持っていないのか、ただバタバタとその場で暴れるそれは一体何なのか。

その生物に対して男がどういった対処をするのか。なかば呆然としたまま男とそれを見つめていた少女は、直後に響いたそれを男が踏みつぶした、ぶちゅん、という音を耳にして反射的に肩をすくめて視線を逸らしてしまう。

そんな少女に気が付いていないのか、男は無造作に、ぶちゅ、とか、ぐちゃ、とかいうどうにも精神衛生上よろしくない音を何度も立て、まんべんなく丁寧に踏み潰す作業を当然の顔で終了させてから、男は晶に顔を向ける。

「こいつがトリードだが……なんだ、本当に見るのは初めてだったみたいだな？」

男の問いに、やや青ざめた表情で頷く少女の表情を見て、ドゥガは少し考え込むように視線を地面に落とした。

トリードはある基本的にある程度の木々が繁茂する場所なら、この大陸のどんなところにでも発芽する自力移動をする捕食植物の一種だ。

それだけにどんな辺境の住民でもその生態や姿形を知っている。何しろ一部の亜種は大陸北部の砂漠にすら適応して見せているのだ。ある意味生活に密着した生物と言ってよい。

だというのに目の前の少女はトリードの存在を知らなかった。

その事実と、朝方の一騒動で知った少女のあまりにも特異な能力。

「おおよそ考えられる場所のどこにでも現れる捕食植物の一種だ。大体の大きさは五メリンから三ロイくらいだ。やたらと亜種がたくさんいるが、まあやることはどいつもこいつも一緒だな」

男が覚えた感情は、目の前にいない何者かに対する強烈な怒りと、少女に対する激しい憐みだった。

外の世界を見たことがないくらいに大事に育てられたのか、それとも何か理由があって外界との接触を断たれていたのか……昨日見つけた時の状況を考えると、恐らく後者だ。

「こいつみたいに森の中で発芽する種類は森の中を歩いているといきなり降ってきて、下にいた生き物に絡み付いて絞殺し、表皮全体から消化液を出して獲物を溶かして表皮から吸収する」

よほど慌てて逃亡……もしくは連れ出されて来たせいだろう。少女があの時身に纏っていたのはサイズが全然合わない男物の服で、

だというのに見たこともない素材、縫製で仕立て上げられた名職人の一品だった。

「まあ、一部の亜種以外その表皮の硬さはエレイアの葉並に柔らかい。きちんと刃物を身に着けていれば簡単に逃げることができる」

そして少女の無知ぶりから考えるに、外界との接触を完全に絶つことができる権力なり財力なりを持つ、よほどの人物が密かに囲っていたのだろう。そこから何者かが……連れ出しその途中であの場所の近くで行方をくらませた。おそらく追手との戦いにでもなったのか……

少女をどこに連れて行こうとしていこうとしていたのか知らないが、少女を連れ出した方も、ろくでもない連中だったのかもしれないな。

……少し考えすぎか。

男は踏み潰したトリードの死骸の方に顔を向け、声を出さずに小さく笑った。

事実はもっと簡単で単純なことである場合の方が多い。裏を考えることも大事ではあるが、それは取れるはずの選択肢を自分で放棄することにも容易につながる。

……俺も少しばかり動揺していたということか。

それだけ朝、少女が見せた異能は衝撃だったということなのだろう。

ともあれ、少女が何らかの厄介ごとに巻き込まれていることと、最低限の常識的な知識を持ち合わせていないことだけは間違いない。
ならば自分が少女に対して為すべきことは、一人でも普通に生活できる程度に知識と経験を与え、ある程度の自衛する技術を教えること……か。

「適当な所でお前にも扱えそうな武器を見繕ってやる。最低限自分の身くらいは守れた方がいいだろう？」

男の言葉にアクィラはびっくりしたように目を見張らせ、それからひどく真剣な表情で大きく頷く。

その少女の表情に男は満足そうな笑みを浮かべると、少女のもとへ歩を進めると徐に膝をついた。そして、戸惑いの表情を浮かべる少女が動く前にその太腿に左腕を回して軽々と自分の肩の上に担ぎ上げてしまう。

「そうと決めたら、少し急ぐことにするぞ？」

恥ずかしさからか、少女は身じろぎするが男は構わずに少女の太腿を手のひらで軽く叩いて落ち着かせ、今まで以上に力強く地面を踏みしめ森を進みだした。

?・距離（後書き）

のっけから何書いてんだという展開ですが、フラグは回収という事で。あとはぱんつをどこで回収するかですか。ちなみに現在のーぱんつです。

色々と悩み事ばかりが増えていくアクィラですが、ドゥガの方はいい感じにお父さんになりつつありますがこの先どうなることか。

そしてついに2体目のモンスター登場だったんですが、なんというか地味なことこの上ないですね……いいんです。雑魚大好きなんです……亜種の中には海竜を捕食するヤツもいるんですよ？多分出てきませんが。

以下、気になる方用の設定ですん。

長さの単位が出てきたので、気になる方用に長さの単位表を置いておきます。

１エリル＝２．８センチ
１０エリル＝１メリン＝２８センチ
１００エリル＝１０メリン＝１ロイ＝２．８メートル
１００ロイ＝１カーディ＝２８０メートル
１００カーディ＝１ミル＝２．８キロ

最初は八進法にしようと思ってたんですが、想像しにくすぎるので断念。

まあ人間の指が五本ならどこに行っても一〇進法に落ち着くんだろうという事で。

ちなみに最小単位が２．８センチなのは、２００年くらい昔に大陸の半分を統一した王国のそれが基準になっているからで、制定時１０歳だった第一王女の小指の長さを基準にしたからだとか。

?・村（前書き）

本日のキーワード

”肉”と”魔法”

?・村

明確にいつごろ森を出たとは言えなかったが、気が付けば頭上を覆うほどの大きさの木々は姿を消していた。変わって視界に広がるのはまばらな低木と、膝程度の高さくらいの草が生い茂る半分草原になっていた。

歩いていた道も、森の中に刻まれたあるかないかの獣道から、少なくとも人の往来を感じるほどの小道に変わってくる。

そしてその小道が刻まれている草原も、二人が足を進めるにつれ段々と草の丈は低くなり、やがて小道から離れた場所に、どういった生物かはわからないが四足の家畜らしき動物の群れが遠く垣間見えるようになる。

――に、しても横の大きさの割に随分平べったい見かけしてるなー……尻尾もやたらでかい気がするけど……

「あれは草食トカゲの一種だな。大陸でも一般的な家畜で卵と肉が取れる」

――なんですと！？

思ってもいなかった家畜の正体を知らせるドゥガの解説に、少女は思わず男の顔を思い切り凝視し、男はそんなアクィラの態度にクツクツと笑いを漏らす。

「何を驚いている？昨日も一昨日も干し肉を食っただろう？」

少女は何とも情けない表情を浮かべ、男は珍しく揶揄するような笑いを浮かべたまま言葉を続けた。

「鳥も魚も食べられるというのに、トカゲが食えない道理はないだろう？あいつらは我らの日々の糧となってくれる生き物だ」

だから好き嫌いはいかん。

男にそうまで言われてしまうと少女が反論するのは難しい。なにしろこの三日間、少女の食生活を支えてきたのはドゥガの持つ保存食と仮の腕だったのだ。

ちなみに少女も一度だけ狩りを手伝おうとし――簡易なものだったが男に弓も作ってもらい――弓を引くこともできなかったので諦めた。

そのことを思い出し、押し黙ってしまった少女の頭をドゥガはやや乱暴になでまわす。

「なに。それが美味いものならばそのうち気にならなくなるだろうさ」

――まあ、そう言われればそうだけどさー……

実際に食べた干し肉はそう悪い味ではなかったことを思い出し、とりあえずこの件に関して“も”割り切ることにした。郷に入りては何とやら、である。

――ともかく、ここまで来たらもう少しなんだろう？

「ん？そうだな……ここからならあと精霊が一回りするくらいだろう」

そんな少女の視線だけの問いかけを、男は正確に理解し、この世界特有の言い回しで村までどれくらいかかるのか答える。

――つまりあと三〇分くらい？で合ってたよな……？

あの、うねうねとうごめく気持ち悪い生物……トリードと遭遇した後から、男は積極的に自分に知識を与えてくれるようになった。

正直どんな考えを持って男がそうしてくれるのか、今一つ晶には理由がわからなかったが、ともかく教えてくれるのはありがたいので感謝だけはすることにした。

――子供とはいえ、一緒に行動する俺が常識知らずじゃ苦労するだろうしなー

男から教えてもらったことは、二日前の朝約束してもらった通りの毒物と薬物についての一通り。この地域周辺の国と大まかな特色？のようなものあれこれ。危険度の高い生物、そうでない生物、植物を一通り。その他にも旅をする上で必要になりそうな技術をあれこれ。正直何でそんなに熱心なのかと少女が思うくらいの勢いである。

――頭の性能は、昔よりよくなってるみたいだから何とかついていけてるけど……

以前の自分なら、どれだけ丁寧にわかりやすく教えられても、半分以上は忘れてしまっているだろう。柔道の成績がそこそこ良かったため推薦で大学には入れたが、中学高校と過ごした時代の成績の悪さには自信がある。

いくら必要に迫られているとはいえ、頭の中身が男のころと同じ性能だったなら、教えられたことをほぼ一度で、洩らすことなく、す

べて覚えるなどできるわけがない。

もっとも、そうであるからこそ“以前”と“今”は別の存在だと知らされるようで、その断絶がひどく気になってしまうのだが。

思わず零れ落ちそうなため息を、晶は慌てて飲み込み、気が付かれないようにそっと傍らを歩く男の事を見上げる。

――正直、何でこんなに良くしてくれるんだろう？

手入れされていないやや長めのぼさぼさの金髪と、それよりも僅かに色の濃い、顔の下半分を覆う髭を生やしたこの屈強な体躯の大男に感謝していないわけではない。無力な自分に保護と、この世界で生きていく知識を与えてくれるのだから感謝してもしきれない。

だからこそ疑問に思ってしまうのだ。

こんな素性もわからない、“胡散臭い”“厄介そうな”自分に親切にしてくれるのか。

――考えても仕方ないか

晶は軽く頭を振って気持ちを切り替える。少なくともこの男は信用できる。いつの時点でそう判断したのかは晶自身にもよくわからないが、この男の傍らを歩くことは思ったよりも気持ちがいい。ほとんど超能力かと思う勢いでこちらの内心を察してくることだけはさすがに閉口してしまうが。

「さほど人の多い村でもないし、俺がいるから特に何かあるとは思えないが……“符”の使い方は忘れていないな？」

嫌な話題を口にする時の、少し疲れた口調で尋ねてくる声に、少女は思考を中断して小さくうなずき、それから少女は腰ひもに括り付けた……ドゥガの手による革製の小さな箱型ベルトポーチ？とでも呼ぶべき物を左手でそっと抑える。

そこに入っているのは、昨日護身用にと手渡されたＡ４用紙を半分にしたくらいの大きさの、不思議な文様と一定の書式で描かれた文字が躍る、数枚の種類の違う紙だった。

『本来なら口訣が必要なんだが、励起文を正確に心の中で辿り念じれば発動する』

昨日説明を受けた時の、男の言葉を思い出す。その分現象が発動する時間と威力は格段に落ちるらしいが、発動するまでは効果を完全に隠蔽できるし、一時的に怯ませたり無力化するには十分らしい。

尤も実際に“符”を行使したことはまだなかったので、どの程度の効果が出るのかは今ひとつわからなかったのだが。

――そんなことより、これのお蔭で色々知ることができたからなー

むしろその時点での晶の驚きは、その“符”と呼ばれるものを構成している素材について向けられていた。

障子紙ほど薄く洗練されてはいないが、やや指先に吸い付くようなその感触は、明らかに「和紙」だった。そして図形と何らかの文字は間違いなく「筆」で書き込まれていた。

この“符”が一般的なものかどうかはわからないが、少なくとも

筆記用具が存在することは確認できた。そして、何らかの『文字』が存在することも判った。

意思伝達の手段を色々考えていた少女にとって、この事実は何物にも代えがたい喜ばしい情報である。

――さすがに野宿の間に教えてもらうのは無理があるからなー

ここまでの道中で何度か口にした言葉を考えれば、男は自分の事をしばらくは手元に置くか、信用のできる知り合いに預けてくれるつもりらしいので、そんなに慌てて覚える必要もない。

そんな風に少女がのんきに考えてしまっていたのは、男の察しの良さに少しばかり依存してしまっているからなのだろう。本人は気が付いていないか……気が付いたらついたで否定したことだろう。顔を真っ赤にしながら。

「そろそろ見えてくるぞ」

男の声に視線を向けるとそこには、木で作られた不格好な二重の柵に囲まれた一〇軒ほどの家屋が立つ……晶の感覚では村というよりも集落といった感じの……村が姿を見せており。

少女はその見た目にも明るそうな、平和そうな村を見て、なぜか背中が震えるのを感じて訝しげに眉根を寄せた。

?・村（後書き）

筆記用具キターーー！！
これで晶くんかつる！！

……すいませんちょっと調子に乗りました。

魔法の行使とか解説は多分今後の本編中でやらかす予定ですので割愛。
草食トカゲ君もそのうち美味しい料理になって出てくると思いますので期待していてください。
期待するポイントが激しく違ってるかもしれませんが。

しかし……主人公がずっとドゥガに食われっぱなしのような気がしますが多分気のせいですね。うん。

そして今さらですが感想とかがありましたら是非お願いします。

?・長

――思った通り、小さいところだなー

少し離れた場所から村を見た時に抱いた感想を、晶は改めて繰り返し、小さく納得するように頷いた。

村の中央にあるのがまず井戸。それを囲むようにやや広めの広場。さらにその周りを囲むように不規則に立てられた家の数は約一〇軒。そこから察するに、村の人口は四〇から五〇人程度だろうか？

森に近い側が草食トカゲの放牧場になっているらしいので、おそらくこちらからは見えない村の向こう側に、耕作地があるのだろう。

――……子供はいないのかな？

時刻は……判らないが、もう少しで夕刻になるだろう刻限だ。これだけ小さな村だからひょっとしたらいないのかもしれないし、もう家で大人しく過ごす時間なのかもしれない。

――……しかし、微妙に人の気配もないような……

「俺が村を出たときはもう少しにぎやかだったんだがな。まあ、聞いてみればわかるだろう。ちょうどあそこにこの村の長がいる」

そう言ってドゥガが指差した先にいるのは、一人だけ身なりの良い恰好をした優男と、それを取り巻く数人の男たち。

――よかった。さすがにドゥガみたいなのはここでも規格外なんだな。

視線の先にいる男たちは、晶から見てもごく普通の体格の者達ばかりだった。具体的には池袋でよく見かけるスーツ姿の男たちくらい……まあ、こちらの住人の方が多少は体格がよさそうではあるが。

そんな男たちの中の、一人だけ身なりのいい人物がドゥガの言う村長なのだろう。他の住居よりも幾分立派な建物の前にいること。ほかの男たちに何か命令するような感じで指を指示しながら話をしていることから考えると、なのだが。

――あんな若い優男が村長？

「なんでも先代の孫らしい。依頼をうけた一週間前に本人から聞いた話では西の方の大きな町……ベルゲンスタインだかで商売をしようとしていたそうだが……」

――それ、失敗して逃げてきたんじゃないか？

微妙な目つきで少女は男を見上げ、男はその視線の意味を正確に理解し、声を殺した笑いをもらす。

「世の中の事は殆ど知らないくせに、どうしてそうも簡単に、世の中を動かす仕組みは察することが出来るんだ？」

――そっちこそ、どうしてそんなに簡単に俺の考えてることがわかるんだ？

「お偉いさんとの腹の探り合いなんか、昔は多くてな。これもまあ経験の賜物ってやつだが……とりあえずお前の表情と行動は一々わかりやすいのが最大の理由だな」

この三日の間で恒例になりつつある、無言の少女と男の掛け合いに気が付いたのか、村長らしい優男がこちらの方に視線を向けてくる。まずは大きく目立つドゥガの方。そしてその横にいる少女に向けられる視線。

その視線に少女の背中がゾワリと震える。

「これはこれはドゥガ殿！お伺いしていた刻限よりもまだ大分早いお帰りでしたが、“はぐれ”の方は片が付いた……そう考えさせて頂いてよろしいのでしょうか？」

少女がその身を震わせてしまった理由に頭を巡らせている間に、優男はそう話しながら二人の傍へと、取り巻きの男たちを引き連れてやってきた。その表情は男の帰還を喜び、依頼の首尾がどうなったのかに期待し、予定よりも早かったらしい帰還に訝しげな表情を浮かべた……演技を見せた。

――まあ、なんというか

先ほど一瞬感じた悪寒の理由を訝しみつつ、ほんのりと生温い視線で少女は男のことを眺める。

「森の導きもあったのだろう。三日ほど前に遭遇し打ち取ってきた。待っていろ、今証拠の品を出す」

そんな優男の様子に気が付かない……いや、おそらく気が付いているのだろうが、無視しながらドゥガは背嚢を下し、その大きな入れ物中をまさぐり始める。

優男一人が話しかけてきたならばまだ、確信を持つほどの疑念を自分もドゥガも感じなかっただろう。
だが、取り巻きの男たちの態度がいけない。全身から『なんでこんなに早く戻ってこれたんだ？』という困惑した雰囲気を振りまいている。

――……あれ？なら戻ってくること自体は予定のうちってことなんだよな？

ドゥガが戻ってきたこと自体を疑問に思っている感じはしない。ならば困惑の理由は早すぎる、彼らにとって予定にない帰還にあるのではないか？
ドゥガの帰還を早すぎると思う原因は？

――さすがに妄想過ぎるか―

ここの常識を自分は持ち合わせていない。大体のところは共感できる、とは思うのだが細かな所での感覚の差異は、その都度出くわすたびに感じ、覚えていくほかない。

「ところで随分村の中が寂しいようだが、俺が出た後でまた何かあったのか？」

目当てのものだったらしい布包みを取り出し、立ち上がったドゥガがそう尋ねると、優男は心底申し訳なさそうに頭を下げる。

「申し訳ありません。あなたの力量を疑ったわけではありませんが、この村を治める者としては住人の安全確保が第一だと思いまして」
「どちらかに疎開させたということか……しかし、ここから一番近い村でも西に三日はあるだろう？移動は大変ではなかったか？」

「それなんですが、ドゥガ殿が出られた二日後に東のエリアスタ公国から隊商がいらっしゃいまして。たまたま空き荷の馬車がありまして、女子供はそれに便乗させていただくことに」
「ほう……それは僥倖だったな。さて、これが証拠の品だ」

ドゥガはそう言うと包みを広げ、ドゥガの握った拳ほどの大きさの二本の白く尖った牙を披露した。その巨大さに優男を含める男達は息を呑み、少女は“あの瞬間”を思い出して表情を硬くし、ドゥガはそんな少女の頭を労わるように軽く叩く。

「森林狼の“はぐれ”の牙だ。大物だったぞ？大きさは……そうさな高さは角竜、体長は七齢の草食トカゲほどはあったかな」

そのドゥガの言葉に村の男たちはその巨大さを想像して身を震わせ、少女は初めて聞いた“角竜”という背の高い生き物がいることを想像して首をかしげる。

「それは……よく御無事で戻られましたね……しかもこれだけ早く……」
「なに、今回はこの娘が助けてくれたのでな。こちらも僥倖を得ていたわけだ」

その男の言葉に、優男は今さら気が付きましたという白々しい態度で少女に視線を送る。

――不自然すぎるっていうか、あからさますぎるんですけどー？

「これは……妖精種の方ですか……」

見ればわかるだろーという突っ込みを内心で入れつつ、まるで内

気な少女であるかのように、晶はドゥガの太腿にギュッとしがみつき、そのまま半身を隠してみる。ついでに上目づかいで優男を見つめてみるオプションも付け……その自分のわざとらしすぎる行動に思わず赤面して俯いてしまう。

「理由はわからんが、森の中に置き去りにされていたらしくてな。この娘を襲おうとしてねぐらから出てきた所を仕留めさせてもらったというわけだ」

「そうでしたか……いやしかし、こんな美しい娘をあの森の中に置き去りですか……」

「まあ、それだけ厄介な理由でもあったんだろうさ」

俺は関係ないとドゥガは肩をすくめ、アクィラはその言葉に不安そうに体を震わせて見せる。

「そうでしたか……ならばこちらのお嬢さんは、お礼代わりに私どもに預けさせていただけないでしょうか？」

優男の言葉に、ドゥガは僅かに眉をひそめ言葉を促す。

「ドゥガ殿はこれから南の方へ行かれるご予定とお伺いしております。その旅程にこれほど小さい子を連れて行くのはご負担でしょうかと思いましたので……せめてものお礼代わりということで私どもの村でお世話をさせていただければと思いまして」

「ふむ……なるほどな……まあ少し考えておこう。置いていくにしろ連れて行くにしろ、この娘と話をしなければならないからな」

「それはごもっともですな」

ドゥガの言葉に男は頷き、それから思い出したように顔を上げる。

「おお、そういえばもうこんな刻限ですな。“はぐれ”の脅威から村をお守りくださりありがとうございました。つきましてはささやかながら晩餐をご用意させていただこうかと思っているのですが」
「そうか……まあ遠慮するいわれはないな。頂かせてもらおう……この娘も相伴させてよろしいか？」
「もちろんですとも。それではこちらでお待ちください」

そう告げて優男は歩き出し、ドゥガとアクィラの二人もそのあとに続く。

ずっと無言のままだった男の取り巻きの、なんとも言えない視線を背中に受けながら。

?・長（後書き）

なんかドゥガの察しの良さが超能力じみてきてますが仕様です。
そしてついに登場した主人公以外の知的生命体！
名前は多分出てきませんけどね！

以下気になる方向けへのちょっとした解説と一部設定です。

当初から出てくる”はぐれ”にですが、突然変異の異常個体の中で、
特に人間に害をなすものと考えてください。
なので、あらゆる動物種の”はぐれ”がいます。
植物の”はぐれ”もいます。
更に異常個体なのでその大きさ等の特徴も個体ごとに違います。
同一種の”はぐれ”でもその大きさはかなり違ったりします。
なお、ある一定の大きさを超える個体は自重を支えるために、ある

種の魔法を自分にかけ続けていると考えられています。
あくまで推測しかなされていませんが。

戦闘能力は異常ですが、あくまでも野生動物です。
いわゆる魔法抵抗力が異常に強かったりしますが、野生動物です。
個体によっては一国を滅ぼしたりするらしいですが、野生動物です。

今後もそんな個体が出てくるかもしれません。

＊ご意見ご感想お待ちしてます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0752ba/

この空の下、大地の上で

2012年1月8日19時45分発行